

魔法の紙芝居

さく:しみず たくと



85歳の認知症のエイジさんは自宅で倒れ
脳梗塞と診断されました。

麻痺はなく身の回りのことができていたので
すぐに退院しました。

退院後、言葉数が少なく何もせずに過ごすことが多く
なったため、心配した家族の希望で通所リハビリテー
ションに行くことになりました。



今日から通所リハビリテーションが始まりました。

作業療法士はエイジさんに今日の体調やリハビリの希望について聞きましたが、エイジさんは軽く頷くだけで何も答えてはくれません。

こちらの話していることは分かっている様子で血圧測定や簡単な体操、以前日課としていた新聞記事の書き写しには応じてくれました。



作業療法士はエイジさんが何も話さないため
どんなリハビリを提供して良いのかわからず困っていました。

そんな日が1ヶ月続いたある日
作業療法士はエイジさんを家に送り届けることになりました。



エイジさんの家は高台にあり
20段以上の階段を上らなくてはなりません。

エイジさんは鼻歌を歌いながら
軽やかに階段を駆け上がり自宅に案内してくれました。

家に帰るとエイジさんはカバンと帽子を片付けると
ソファーに深々と座り寝てしまいました。

Zzz



奥さんに自宅での様子を聞くと

「前は散歩にも行ったりしてたけど
倒れてからはいつもこんな感じよ」

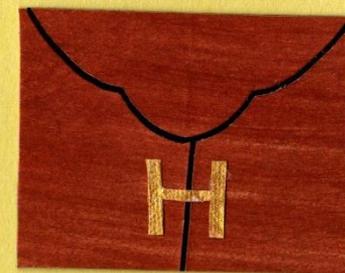
と話してくれました。



作業療法士は帰り際、玄関脇の荷物の横に紙芝居の舞台が置いてあることに気づきました。

奥さんに聞くと、エイジさんは退職後に近くの小学校や幼稚園で紙芝居を読むボランティアをしていたと話してくれました。

作業療法士はエイジさんと奥さんをお願いして紙芝居の舞台を借りて帰ることにしました。



次の週、通所リハビリテーションで作業療法士が図書館で借りてきた紙芝居をエイジさんに読んで欲しいとお願いしました。

すると、エイジさんは軽く咳払いをしてから昔を思い出したかのように紙芝居を読み始めました。

「え～あるところに・・・」

エイジさんの低く優しい声を初めて聞いた作業療法士は驚きました。



ウン

その次の週も、そのまた次の週も
紙芝居をエイジさんに読んでもらいました。

するとエイジさんの紙芝居は
通所リハビリテーションの名物となりました。



作業療法士が準備していた紙芝居も
今では奥さんと一緒に近所の図書館で
借りてきてくれています。



ドンドン。

今日も紙芝居の始まりを告げる太鼓の音が響きます。

「それではエイジさんの紙芝居のはじまり、はじまり～」

